

私と情報メディアセンター

伊藤 博文(法科大学院)

2011年3月末で、みよし市にある愛知大学名古屋校舎内の名古屋情報メディアセンターはなくなります。なくなるといっても、新名古屋校舎(ささしま)に新しい名古屋情報メディアセンターは移るので消えてなくなるわけではないのですが、1988年開校の名古屋校舎(みよし市)とはお別れをすることになります。そこで情報メディアセンターにまつわる思い出ということで、私個人の話を書かせていただきます。

以前、本誌(35号)の巻頭言でも書いたことがあるのですが、私と名古屋情報メディアセンターとの関わりは24年程前に遡ります。私が本学大学院法学研究科の大学院生であったころ、名古屋校舎にまだ出来たてであった情報処理センターによく通いました。私は修士課程は豊橋校舎で学び、博士後期課程進学と同時に、新たに開学した三好校舎に通うこととなりました。当時、文系学生に縁遠かったコンピュータに接することができる情報処理センターは、コンピュータ・オタクの私にとっては、いろいろな情報が得られる心休まる場でした。所長を務められた浅野俊夫先生や事務の樋口裕嗣さんには、いろいろと教えていただいたことを思い出します。

当時のコンピュータといえば、マイコンという言葉からパソコンへと移りつつある時期で、NEC社のPC98シリーズがパソコンの代名詞のような時代でした。1987年に登場したマイクロソフト社のWindows Ver. 2.0はまだ使い物にならないもので、MS-DOS全盛期のころでした。コンピュータの専門家といわれる人は理系の人達で、IBM社の大型計算機やSUN社のUNIX(Soralis) Workstation, DEC社のVAXを使い、文系の学生には全く縁遠い世界でした。そこに、文系学生でも使えるApple社のMacintoshやNEC社のPC98シリーズが現れて、1989年当時にはFujitsu社FM-TOWNSとかNEC社のノートパソコンPC-9801N, EPSON社PC-386Vといったマシンが登場してきました。当時、愛知大学は、このPC98シリーズ機が情報処理の授業で扱えるという先進的な情報処理教室を持っており、東海地区の近隣大学間でも注目されるような情報教育に取り組んでいて、この情報処理センターが大学における情報教育の推進エンジンとなっていたと記憶しています。

大学院博士課程を修了し豊橋短期大学に就職した後暫くして、非常勤講師として愛知大学に来ることとなり、情報処理センターとの関係は続くこととなりました。非常

勤講師として教えた講義の中では、もう既に取り壊された車道校舎の情報処理教室や豊橋校舎のコンピュータ教室で、最新のパソコンを使いながら講義をしたことが思い出されます。当時は、他大学でも非常勤講師として情報系の講義を担当しておりましたので、他大学との比較でも愛知大学の情報処理教育のやり方、ハードウェアの揃え方、ソフトウェアの選定などでは大いに参考にさせていただきました。

2004年の法科大学院開学とともに、愛知大学の専任教員となり、この時より名古屋ICT委員となり、情報メディアセンターとの関係は更に続きました。そして、2008年に名古屋情報メディアセンター所長に就くこととなるのですが、20数年前の私には、自分がセンター所長になるとは思ってもよらず、この良き伝統を継続し更に大学での情報教育の先端を走り続けるような情報教育環境を提供できるように努力しなければならぬと、改めてその任の重さを感じています。

この良き伝統を引き継ぎ、新しいささしまライブ21での新・名古屋校舎でも、名古屋情報メディアセンターを運営していこうと決意を新たにしている次第です。